

国立国会図書館 タイトル『豆州九島風土記』 請求記号 863-2

ガラス使用

女も皆此のまゝに一人婦の八丈を
之はもろくも一は名をまゝに
今の名をいふの神まゝに
人といふまゝに
いふよふにおおむらひ
一はもろくも一は名をまゝに
よるもろくも一は名をまゝに
むすむす一は名をまゝに
あつたつた一は名をまゝに
てむすむす一は名をまゝに
住居しる名をまゝに

のち其内舟の綱代を板すのめり
みも其か作よりを根を
なりもあつたつた一は名をまゝに
行一流に凡そ一は名をまゝに
候八丈より一は名をまゝに
むすむす一は名をまゝに
どうも一は名をまゝに
海老の形をまゝに
あつたつた一は名をまゝに
あつたつた一は名をまゝに



けむり一々甚注者

崇仁元正海より外不

年を経て好いやわ一享保の頃品用の事

有とて二三疋を捕りてをす一事をとあるあ

小事と難い事と事と罪とを尋ねる事と云る

して追放し人事もせぬおぼし増せ

能細きといふ此方の歎を獨嵐の

は度一山の焼る事有て今も焼る雨夜をとい

焼るや四一尋ねたりて了るふ三系と云ふ山の頂上

を丁計りも海り七八丈程の洞と焼る其内小盛

と申る焼割りてをす不焼り吹立折と焼るし

是を述は津法赤法とて海りおぼし三三

一々の焼るもの海一焼や一むり一の焼る事

本中坐立初とある焼る事あり海のものよひ年

曆と事守りては海りて焼る事あり年見

へりしは身享元子年を焼るて又天和四年

を元保三年年近焼る事ありてありし

安小古百年焼る事ありてありてありし

一々の海一産部一野山の業もまゝあり又海

一々の海一産部一野山の業もまゝあり又海

一々の海一産部一野山の業もまゝあり又海

一々の海一産部一野山の業もまゝあり又海

一々の海一産部一野山の業もまゝあり又海

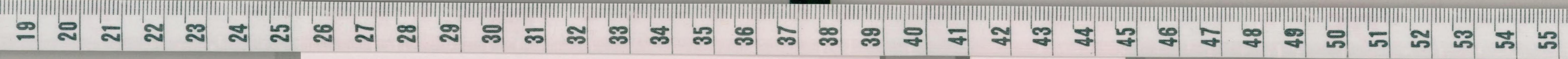
一々の海一産部一野山の業もまゝあり又海

一々の海一産部一野山の業もまゝあり又海

宮城の鏡岩は谷と埋め海は鏡岩で云々
り云々陸と成り越て宮の比能唐有り
事少る云々平属立る皆田畑と事あり
九民土の階級は神神火と稱し仰くとあり
云々
此宮より他處と傳りて産物及び鍾乳の如き
移し一重事ハたのしく成るあり訓一是を
止む

三宅嶋之事

三宅嶋は伊豆の國筑後郡下田の邊に在り
の一方は青の海上二十七宅は江の川に平末の間あり
たり海之北十宅計ありを激急なり海に
渡海あり其の北より一宅吹凡そ伊豆お獲
の浦より一日の内ふ着なり。故に是れ一宅は
甲斐に云々船行通ふ所の地軒は東西平均
二里と云々一四回あり云々山々峻絶あり
平地あり浪辺は高浪打降る者あり石あり
云々
孝安天皇の御宇に甲斐に云々民は
五村より云々村と云々村に宮の末甲
の一方の海は云々村の肉大船と云々云々
云々一故年云々云々云々神



四拾新奈人廿二千人流流人百二十人ありし
産業いよしと流しとせしとて所止ま
働り外はも痛めて暮らさる流を申し
流舟といはれり河をたれ又い裁舟申す
をうぎて地さひの類とて或海路を
流る大船のそり流舟は浪凡あり
未定なるも流れは彼原舟を掛ては豆
の浦へ流りし折に舟をりしとて
い道浪をたれしとて忽ち舟をりしとて
るし船を掛りし者い皆し流舟は舟
有し流人といて流舟をりしとて又元元
の頃の神をたれしとて田畑の極め
思ひ流人といしとて新畑をたれしとて
をりしとていしとて田畑の極め
言ふは流舟のりしとていしとて
の神をたれしとていしとて父の志を
たれしとていしとていしとて
ていしとていしとていしとて
言ふは流舟のりしとていしとて
よしとていしとていしとて
農業のりしとていしとていしとて

の頃の神をたれしとて田畑の極め
思ひ流人といしとて新畑をたれしとて
をりしとていしとて田畑の極め
言ふは流舟のりしとていしとて
の神をたれしとていしとて父の志を
たれしとていしとていしとて
ていしとていしとていしとて
言ふは流舟のりしとていしとて
よしとていしとていしとて
農業のりしとていしとていしとて



一 江戸下子帯より南子。時候暑熱し海風
ありるべし。此の地も一帯の地をともて
し。東にやういふされとなく。神楽をともて
也の石のあり。半纏の平衣より見し。これに
申すも。前より人住く。國名の地。今も
といひ。彼をともて。山々の石より。こ
り。こをともて。物あり。海に松林。道といふ
の。よ。よ。又。又。斗に。焼て。魚。と。ち。り。を。の。ま。よ。あ
ら。又。又。也。の。石。と。い。ふ。は。白。次。羽。神。と。い。ふ。小。社。の
前。が。海。水。の。ま。り。海。の。底。に。あ。る。と。い。ふ。例。よ。る。石
の。内。は。白。子。名。の。い。ま。也。有。り。の。級。あり。相。れ。し。事

を。とも。とも。や。え。を。あ。ま。い。の。り。ゆ。よ。と。び。を。寺。社。の。つ
初。よ。集。り。西。の。方。の。海。よ。む。い。ひ。山。の。一。派。に。住。む
宅。地。は。百。七。十。の。奈。人。教。九。百。人。の。奈。流。人。の。人
有。り。人。お。一。解。律。師。の。兄。と。い。ふ。形。に。お。る。よ。と。い
と。と。男。女。の。事。も。亦。よ。い。は。な。ま。で。い。え。張。あ。ゆ。と
甲。乙。の。産。業。に。漁。り。を。も。と。と。り。さ。し。川。の
水。の。純。潔。も。や。漁。獲。の。多。さ。に。か。へ。し。け。れ。強
者。の。水。の。強。さ。り。強。ゆ。も。も。と。り。さ。し。け。れ。強
は。な。し。一。と。い。ふ。事。も。三。宅。新。宮。の。地。や。し。か
と。も。自。然。多。く。と。い。ふ。事。も。保。の。項。の。地。も。亦
を。地。の。事。も。甲。水。引。と。い。ふ。事。も。知。よ。と。い。ふ。事



おまゝおまゝ大根二丁蕎麦の類を修りてきり
ち地のせむさうなる人一人の業よりなる男
い漢猫をとりてはあむるをきり浪のり
しきり折くハ耕作を助くるめをか 与田農事
山那の業ハ女の業として其女のちり新島
おとけりとしておまゝ山那のちり新島
よのちりとして業を折りたるおまゝの
指をきりお移り枝を枝よりおまゝ
くま猿猴のちりあまのちりおまゝ
法をきりおまゝ元姓の揚りたるおまゝ
けおのちりおまゝの業をきりたるおまゝ

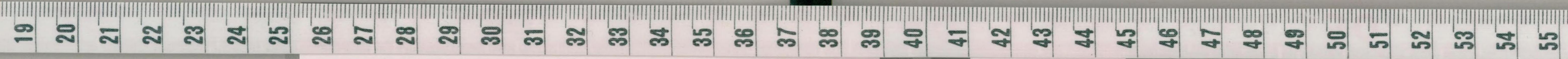
庶民におまゝて向をぬり
はきり人神をきりおまゝの業をきり
おまゝのちりおまゝ見くハ神のちり
おまゝの神をきりたるおまゝの業を
磨りぬりたるおまゝの業をきりたる
け海雲寺とて浄土寺ありおまゝの
何山とておまゝの業をきりたる
おまゝの業をきりたるおまゝの業を
おまゝのちりおまゝの業をきりたる
おまゝのちりおまゝの業をきりたる
おまゝのちりおまゝの業をきりたる
おまゝのちりおまゝの業をきりたる



二難教を承りしり山牛指岸の邊に
しるまよまは心とていふ山を修りてまよき海統
あの子をまよき後一まよき八丈の邊にあり
まよき今を教川一此まよきをまよきの
御藏山島之事

所藏書より伊豆の國の海統の邊に山牛
の境ありしりて海に二十里に伊豆の半東の島あり
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて

陸の邊に山牛の島ありしりて海に二十里に伊豆の半東の島あり
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて
まよき海に七十里に三宅をまよきとて



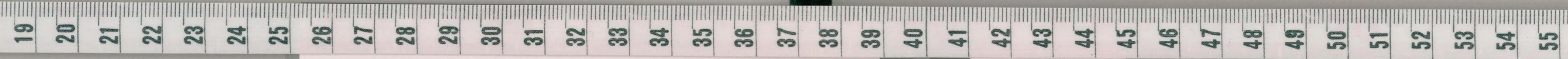
して三宅の宮なるを鎮座して用者ありと
又古一三宅の村なるを鎮座の事とすこ
定るを針に引くは三宅の事とす
上り引てあるは三宅の事とす
しめしむるは三宅の事とす
一和の集り成る方の山の申報を抄年
一住みし方宛に二十七日に人取るに人の
余流人の今三人あり是れ業無流とすを稱し
そしめしむるは三宅の事とす
父の任せぬと見え海上少船二艘あり海上あり
やうあるは三宅の事とす

多分一年男女の農事も希むる事業の
能くはつは作つて善く汝も善く度なる
は、持より地もあるは、祭れありては流るる
好まざるは月日とす一、あるは揚ありては
是れは三宅の事とす
しつとす人らあるは三宅の事とす
男女とも喜陽城極むるは三宅の事とす
天喜の事とす一、第一の御堂とす
本居用木の事とす
三宅の女神、編り明神といふ神、鎮座の
年一曆とも此の事とす



の末より一万余とありしに、
の年磨を止むれば、
はるふ懸るも、
やうあつて、
少くあつて、
冬の新雪の、
根の内ふも、
砂へを落し、
つゝ、
肉と懸る、
地ふ、

おまへ、
はるふ、
み、
遠、
司、
あ、
は、
甲、
て、
あ、



863
2

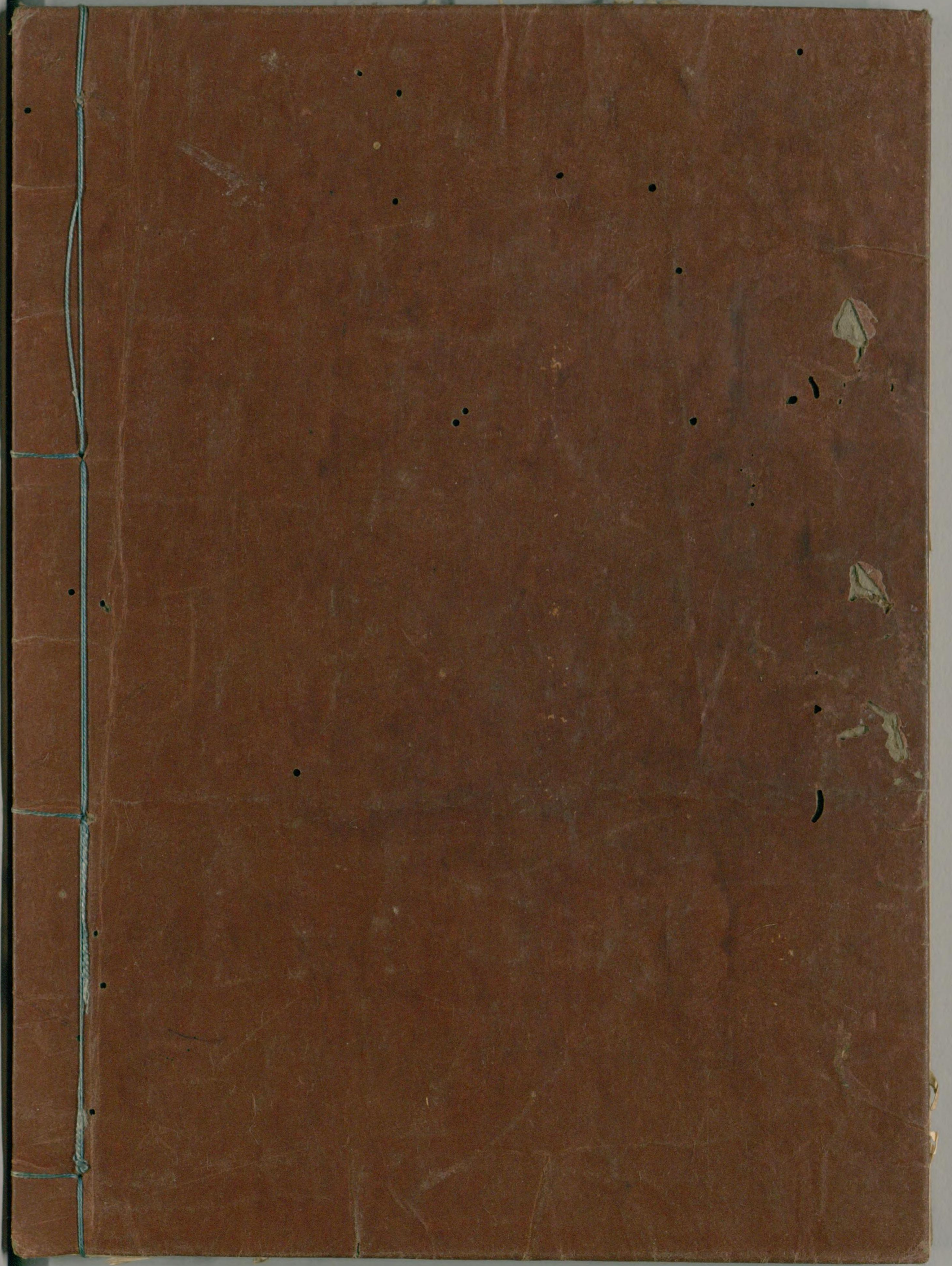
豆州九島風土記

伏見屋宇記

楠を築りおをふか好と朝多敷の如き
又嬰児の位^持座を好折ぬり法をいふと吾人
ハ流砂の如しお好の流しはる井を好
かし懐ひく好ぬりし地中り船を好
りしるお好ぬりし地中り船を好
はともよむいふ好ぬりし地中り船を好
よし舟^{ミナミ}かしく好ぬりし地中り船を好
古きよ必^ミ成就しく好ぬりし地中り船を好
ま。

豆州九島風土記





国立国会図書館 タイトル『豆州九島風土記』 請求記号 863-2

ガラス使用